



# MINO SOIL

Exhibition Vol.02

## Transfigurations of Clay (Becoming Form)

会期：2022年4月19日(火) - 29日(金) \* 23日(土)、24日(日) closed

\*プレスレビュー：4月18日(月) 14:00 - 16:00

会場：Karimoku Commons Gallery (東京都港区西麻布 2-22-5)

# MINO SOIL

岐阜県美濃地方は、日本でもっとも陶磁産業の盛んなエリアとして知られています。

その特徴は、伝統ある美濃焼の芸術品から、日常のスタンダードになっている食器、そして建築やインフラのためのタイルやファインセラミック製品まで、きわめて幅広い領域をカバーしていること。こうした産業が発展してきた根幹には、美濃で採れる土のすばらしさがあります。「MINO SOIL」は、美濃の土の可能性をあらためて、デザインを通じて発信するブランドです。地球の恵みの土そのものの価から、使い手に伝えていけるようなものづくりを、ローカルの土、ローカルの人々と技術、そして確かな世界観をもつデザイナーとで挑戦していきます。

## Exhibition vol.02

### 「Transfigurations of Clay (Becoming Form)」

会期：2022年4月19日(火) - 29日(金) \* 23日(土)、24日(日) closed

OPEN：12:00 - 18:00 (最終日は～16:00)

会場：Karimoku Commons Gallery (東京都港区西麻布2-22-5)

\*プレスレビュー：4月18日(月) 14:00 - 16:00

MINO SOIL が2回目のエキシビションを開催します。

2021年6月に開催した1回目の展示は、美濃の陶磁器産業を支えてきた土そのもの、素材の価値をあらためて、一からみなさんと見つめ直すものでした。

2回目の展示では、国内外7組のデザイナーとのコラボレーション。デザイナーたちにはまず、数種類の美濃の原土に触れてもらいました。そこから何かの可能性を感じ、浮かび上がったイメージを美濃の職人と試行錯誤をしながら形にしていきました。

美濃の山から掘り出した原土、人の手、そして美濃で古くから用いられている陶磁器製造技術の中で象徴的な「たたら」「押し出し」という2つの技法、そして火。そこから生まれた、何かに使うためのもののような、まだそうでないような純粋なものたちです。



#### 【参加デザイナー】

カネ利陶料 (陶土製造販売/日本)、クーン・カブート (デザイナーデュオ/スイス)、ディミトリ・ベイラー (デザイナー/スイス)、長坂 常 (建築家/日本)、藤城 成貴 (デザイナー/日本)、リナ・ゴットメ (建築家/フランス)、ワン&ソダーストロム (クリエイティブ・デュオ/デンマーク)

## Exhibition vol.01 「Archaeology of Mino」

2021年6月に初のエキシビションを開催しました。

インド・ムンバイを拠点とするピジョイ・ジェイン率いるスタジオ・ムンバイとのコラボレーションで、陶磁産業の原点である「土」「鉱山」をテーマに、さまざまな状態の土そのものと鉱山の写真を展示。

素材に宿る原初的な存在感と美しさを表現。地球そのものの歴史である土と、地球上に生きる人が、ともに大きなサイクルの中で存在することの大切さを意識を促す展示を行いました。



photo: Yurika Kono

# 利

## カネ利陶料

明治創業。"製土の父"と云われる二代目は、水車の動力を用いた石粉業から製土業へ方向転換、同時に製土組合を設立し粘土鉱山を入手するなど、原料確保に力を注いだ。三代目で土物の制作も始める。四代目はお客さまの要望に応じた土づくりをする、「顔の見える土屋」へ転換。現在、五代目。土づくりと、土の個性を生かした作品づくり、作り手の好みを表現しやすい土の提案をしている。敷地内に shop も併設。作家や窯元と対話を繰り返しながら、地球の大切な資源を用い、オーダーメイド陶土というかたちで供給している。



## Kueng Caputo / クーン・カプト

スイス出身のサラ・クーンとルヴィス・カプトがスイス芸術大学卒業後に活動をスタート。アート、クラフト、プロダクトデザイン、アクティビズムと幅広い分野でデザインを手がけている。徹底して現状に疑問を持ち、控えめな表現と即興に重きを置き活動。クーン・カプトはサロン 94NYC に所属し、数多くの国際的なエキシビションに参加。また、Fendi、Globus、2016/ Arita などのブランドとコラボレーションしている。2020年には連邦文化局からスイスのデザイン大賞を授与。www.kueng-caputo.ch



## Dimitri Baehler / ディミトリ・ベイラー

1988年生まれ、スイスのBielを拠点に活動。ECALとDAEを卒業後、2014年に自身のスタジオを設立。量産のプロダクトから、一点もののアイテムまで手掛けている。用途の広い一見自然発生的、過激かつ詩的であり、常に実質的な応用研究に基づき、特に質感と色に関心がある。HAYやEstablished & Sonsなどとの協働のほか、自身で陶器の作品を手掛け、Wallpaperストアなど世界的に販売。2013年イェールのDesign Parade 8のファイナリストに選ばれ、2014年と2015年にはSwiss Design Awardsにノミネートされている。

<https://dimitribaehler.ch/>



## 長坂 常 / スキーマ建築計画

スキーマ建築計画代表。1998年東京藝術大学卒業後にスタジオを立ち上げ、現在は北参道にオフィスを構える。家具から建築、そして町づくりまでスケールも様々、そしてジャンルも幅広く、住宅からカフェ、ショップ、ホテル、銭湯などを手掛ける。どのサイズにおいても1/1を意識し、素材から探求し設計を行い、国内外で活動の場を広げる。日常にあるもの、既存の環境のなかから新しい視点や価値観を見出し「引き算」「誤用」「知の更新」「見えない開発」「半建築」など独特な考え方を提示し、独自の建築家像を打ち立てる。代表作に、Sayama Flat / HANARE / FLAT TABLE / ColoRing / BLUE BOTTLE COFFEE / 桑原商店 / お米や / DESCENTE BLANC / HAY / 東京都現代美術館 サイン付器・家具など <http://schemata.jp/>

photo : Yuriko Takagi



## 藤城 成貴

株式会社イデーのデザイナーを経て、2005年に自身のスタジオ「shigeki fujishiro design」を設立。インテリアプロダクトを主軸に活動を行なっている。エルメス、アディダス、カンパール、有田焼のブランド「2016/」といったブランドとのコラボレーションをする一方、自身でプロダクトの企画、生産、販売まで行なっている。近年の活動としてはデンマークのテキスタイルブランドKVADRAT社によるプロジェクト「Knit!」に参加している。

<http://shigekifujishiro.com/>



## Lina Ghotmeh / リナ・ゴットメ

パリを拠点とするLina Ghotmeh Architecture創設者。ペイルートで生まれ育った経験を反映した彼女の仕事は、"未来の考古学"として編成され、どのプロジェクトも歴史的かつ物質的に繊細なアプローチによって行われ、完全に自然と共生するような形で現れる。主なプロジェクトに、エストニアナショナルミュージアム (Afex 2016 グランプリ受賞)、ペイルートの住居とギャラリースペースをもつ "Stone Garden" (2A アワード、2021年のDezeen Architecture of the year 受賞)。建築では現在、ノルマンディのアトリエ エルメスの設計を手がけている。作品は、第17回ヴェネチアビエンナーレ、Phaidon、RIBA、DomusやArchitectural Recordなどで世界的に紹介されている。www.linaghotmeh.com



## Wang & Söderström / ワン&ゾダーストロム

スウェーデン出身、コペンハーゲンを拠点に活動するAmy WangとTim Soderstromによるアーティスト・デザインデュオ。デジタルテクノロジーと素材や生きものといったフィジカルなものの領域を探求しながら、彫刻や視覚イメージ、インスタレーションなどさまざまな作品を制作。Tim (b.1988)は、2015年にコペンハーゲンのThe Royal Danish Academy of Fine ArtsとSchool of Architecture (MAA)を卒業。Anny (b.1990)は、2014年にスウェーデンのHDK, Academy of Design and Crafts, University of Gothenburg (BFA)を卒業。RIMOWA, Nike, HAY, Iittala, Polestar, Burberry, SONOS, Adidas, The New York Times and Apartamento Magazineなど、企業やブランドとのプロジェクトを手掛けている。

<https://wangsoderstrom.com/>

写真：  
高野ユリカ

サウンドインスタレーション：  
藤口亮太

お香：  
Curdin Tones (クルディン・トネス)

グラフィックデザイン：  
Sebastian Fehr (セバスチャン・フェア)

テキスト (日本語)：  
土田貴宏

プロダクションマネジメント：  
永井佳子

クリエイティブ・ディレクション：  
David Glaettli (ダヴィッド・グレットリ)

ファウンダー：  
株式会社エクシズ、株式会社井澤コーポレーション

協力：  
カネ利陶料、丸新製陶有限会社